構文編

編集
鈴木一彦
林巨樹

編集協力
飯田晴巳
猿田知之
中山緑朗

明治書院

編　者

鈴木　一彦（すずき　かずひこ）

林　　巨樹（はやし　おおき）

研究資料日本文法
第8巻　構文編

創業88周年記念
特別定価 2,800円

昭和59年6月25日　初版発行

東京都千代田区神田錦町 1-16
発行者　株式会社　明　治　書　院
代表者　三樹　彰

長野県長野市中御所2-30
印刷者　大日本法令印刷株式会社
代表者　田中　忠

発行所　株式会社　明　治　書　院
〒101　東京都千代田区神田錦町 1-16
電　話　東　京　（292）3741（代）
振　替　口　座　東　京　3—4991

© K. Suzuki　1984　3381-26608-8305　製本　星共社

編集にあたって

言語に対する見方、言語観の相違が文法観の相違を生む。また、対象とする言語の違いによっておのずからそれに対する文法論上の処理も異なってくる。

江戸時代以前、日本の研究者は、日本語の本質を踏まえながら、それなりの文法体系を作り上げてきた。一方、十六世紀以来、西洋人の手によって、西洋文法の立場から日本語に対する文法的処理を行うといういくつかの成果が生まれ、それに従う日本人の学者の業績もあった。

右のような伝統的文法観、西洋文典の体系に基づいて整理された日本文典、両者の折衷によって作り上げられた文法理論など、さまざまなものの上に立って、明治以後、大槻文法・山田文法・松下文法・橋本文法・時枝文法などと称されるものをはじめとして、多くの文法学説が提示されて今日に至っている。

今回刊行される『研究資料日本文法』全十巻は、以上のような過去の文法学説をふり返りながら、語論・構文論・敬語論・修辞論など広い分野にわたって、新しい視点から、それぞれの論を展開することを一つの目的としている。外国語・方言の分野からの論考を加えたのも、広い視野から日本語を見直そうという立場によるものである。また、「研究資料」という見地から、文法に関する過去の資料のうち基本的なものを選んで、それに対する解説を付し、可能な限りの注解を施して読者の便を計った。加えて、文法上問題となる諸事象について新しく調査収集、整理したものを収載した。これは、これからの国語教育に役立つことをも企図している。さらに、各

巻の巻末には、これからの文法研究に資するために、それぞれの分野における基本的参考文献を出来る限り一覧し得るよう収載することにつとめた。

全巻を貫いている一つの考えは、文法学説史の整理という点にある。学説史を辿ることによって、文法について今日どのようなことを問題にすべきか、どのような研究課題があるかを知ることが出来ると思うからである。十年ほど前に刊行された『品詞別日本文法講座』は語論を中心とした論考が主なものであり、資料編も生のままを提示するにとどまっていた。これを拡大充実し、前述の趣旨によって企画したのが今回の十巻である。

読者が、文法知識を整理し、みずからの目で対象としての日本語を見つめて、文法はこうあるべきだと悟る、そのために本書の論考および資料は資するところ大であろう。また、そのような観点で活用されることを願ってやまない。

鈴木一彦
林巨樹

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

研究資料日本文法 全10巻

編集 鈴木一彦・林 巨樹

創業八十八周年記念出版

特別定価 各二八〇〇円

過去の文法学説をふり返りつつ、語論・構文論・敬語論・修辞論等、各分野にわたって新しい視点から問い直す新シリーズ。過去の重要な基本資料も注解して紹介したほか、文法上の諸問題を提示解明。

好評配本中

全10巻の構成（毎月一冊配本）

①品詞論・体言編 名詞 代名詞 第7回配本

②用言編(一) 動詞 発売！

③用言編(二) 形容詞 形容動詞 第8回配本

④修飾句・独立句編 副詞・連体詞 接続詞・感動詞 第5回配本

⑤助辞編(一) 助詞 発売！

▼内容見本呈

⑥助辞編(二) 助動詞 発売！

⑦助辞編(三) 助詞 助動詞辞典 第10回配本

⑧構文編 発売！

⑨敬語法編 第6回配本

⑩修辞法編 第9回配本

A5判 平均三三〇頁 箱入

明治書院

執筆者紹介

①生年月日　②卒業校　③専攻　④現在

林　巨　樹（はやし　おおき）　①大正13年4月26日　②東京学院大学大学院　③国語学　④青山学院大学教授

森　野　宗　明（もりの　むねあき）　①昭和5年4月8日　②東京教育大学大学院　③国語史　④筑波大学教授

高　野　繁　男（たかの　しげお）　①昭和9年6月29日　②上智大学大学院　③日本語学　④神奈川大学外国語学部助教授

林　四　郎（はやし　しろう）　①大正11年1月11日　②東京大学　③国語学・文章論　④筑波大学教授

宮　地　裕（みやじ　ゆたか）　①大正13年1月14日　②京都大学　③国語学（文法論・表現論）　④大阪大学教授

山　口　仲　美（やまぐち　なかみ）　①昭和18年5月25日　②東京大学大学院　③国語学　④共立女子短期大学助教授

奥津　敬一郎（おくつ　けいいちろう）　①大正15年8月6日　②東京文理科大学大学院　③日本語学　④東京都立大学人文学部教授

鈴　木　一　彦（すずき　かずひこ）　①大正12年6月25日　②東京大学大学院　③国語学　④山梨大学教授

飯　田　晴　巳（いいだ　はるみ）　①昭和21年6月30日　②青山学院大学大学院　③国語学　④青山学院大学講師

目　次

1　文の組み立て　林　巨樹　1

一　「文の組み立て」論の範囲……2
二　構文論の展開……27
三　文型の基本構成……35
四　文脈の病理……42

2　文と語の間にある単位——文節・句・文素など　森野宗明　51

はじめに……52
一　文法学説と文法上の単位体……54
二　山田文法の語と句・文……55
三　橋本文法の文節……61
四　文節に類するもの——文節の問題点……66
五　時枝文法の句……72

3 文とは何か

高野繁男

一 はじめに …… 76
二 山田文法の句論 …… 77
三 松下文法の断句論 …… 81
四 橋本文法の文 …… 86
五 時枝文法の文論 …… 92
六 渡辺実氏の陳述論 …… 96
七 むすび …… 100

4 文構造の諸学説

林四郎

一 大槻文彦『広日本文典』の「文章篇」 …… 104
二 落合直文『日本大文典』の「文章」の論 …… 110
三 岡倉由三郎『新撰日本文典』の構文論 …… 115
四 山田孝雄の「合文」説 …… 122
五 山田文法の「格」の種類 …… 124
六 松下大三郎『日本俗語文典』の構文論 …… 126
七 『改撰標準日本文法』の構文原理 …… 130
八 松下文法の「格」 …… 132
九 学校文法の文の成分 …… 134

一〇　時枝文法の入子型構造……138
一一　時枝文法の「格」……140
一二　林の構文観……143
一三　一つの述語にかかる構文要素……147
一四　連結と展開の扱い……154

5　主語・主題・提示語・総主語　宮地　裕　159
はじめに……160
一　主語のない文・あいまいな文……160
よびかけ文・わかれ文・詠嘆文・応答文　判叙文・要求文
二　提示語・総主語……175
提示語　総主語
三　主題文の一面……179
名詞述語文　「象は鼻が長い」「象は力が強い」「象は鼻の力が強い」

6　文章の展開　山口仲美　193
一　はじめに……194
二　池尾の禅珍内供の鼻の語……194
三　今昔説話と芥川の「鼻」……198

四　今昔説話の文章展開……199
五　プロットと起承転結との関係……202
六　短い説話と長い説話の文章展開……205
七　日記の文章展開……208
八　随筆の文章展開……211
九　歌物語の文章展開……213
一〇　物語の文章展開……215
一一　説話の文章展開の源流……217
一二　説話と昔話との差異……219
一三　おわりに……222

7　変形文法・生成文法

奥津敬一郎

一　はじめに……223
二　言語とは何か……224
三　文法の組織……226
四　受身文……228
五　授受動詞文……230
六　自動詞文と他動詞文……237
七　おわりに……238
……241

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

資料Ⅰ　1橘守部「三撰格」抄　［鈴木一彦］　246
長歌撰格　短歌撰格　文章撰格
2近世以前の構文研究書抄　［飯田晴巳］　271
八雲御抄　手爾葉大概抄之抄　国文世々ノ跡
詞の玉緒　詞通路
資料Ⅱ　構文関係研究文献一覧　［飯田晴巳］　301

1

文の組み立て

林　巨樹

一　「文の組み立て」論の範囲

「構文論は、まだじゅうぶんな研究がなされていない分野であり、構文論の体系の整備は、なお今後に残されている」とは『日本文法辞典』（昭和三三年）のその項にしるすところである。「文の組み立て」という標題は、そのような分野についての、初歩的な展望を志している。

大槻文彦『新体日本文法教科書』（明治三七年、開成館）は三巻から成る中学校師範学校及高等女学校国語科用・文部省検定済の教科書であるが、その下巻は、

第一章　句
　第一節　説明部
　第二節　客部
第二章　文
第三章　主語
第四章　説明語
第五章　客語
第六章　修飾語
第七章　語句の倒置
第八章　語句の省略
第九章　文脈の解剖
第十章　聯構文
第十一章　温習

から成っている。もとより『広日本文典』（明治三〇年）の文章編に基づくものであるが、この方が分かりやすいと思われるので、その第九章・第十章・第十一章を次に掲げる（例題を省く）。

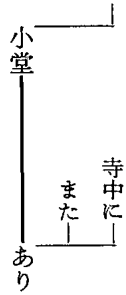
第九章　文脈の解剖

既に説きたるが如く、文は全き思想をあらはすものにて、これがために、想の主題をいふ主語もしくは主部と、主題たる物事の動作、有様などをいふ説明語もしくは説明部と、ある時には、この動作、有様などの目的または標準をいふ客語もしくは客部とを具ふ。この故に、全き想を、正しく且つ明にあらはさむとするには、必ずこれらの語もしくは句、節を、それぞれに定りたる法則に従ひて、用ゐることを要す。

これと同じく、成文を正しく且つ明に解釈せむとするには、必ずその文のあらはせる想の主題は何か、その主題に就きて、いかなる動作、有様などをいへるか、また、この動作、有様などの目的或は標準たるものは何かといふことを知らずてはあるべからず。即ち、その文を成せる語、句、節を解きはなして、これを主語もしくは主部と、説明語もしくは説明部と、或は別に客語もしくは客部とに、分別するを要す。かやうに成文を分解することを、**文脈の解剖**といふ。

文脈を解剖するときには、語、句、節の倒置せられたるものは、本来の位置に復し、省略せられたるものは、補ふを要す。文脈を解剖するには、本書にては、便宜に図式を用ゐる。この図式は、先づ主語と説明語とを直系に、客語を傍系に、いづれも実線にて連ね、各修飾語を、その所属に従ひて、適宜に点線にて結ぶものにて、文中に含まれたる句・節の組立を示すにも、また、これに準ず。次に、数例を挙ぐ。

寺中に、また、一つの小堂あり。



わが軍、逆襲し来れる優勢なる敵を撃ち退けたり。

逆襲し来れる
優勢なる
敵を
わが
軍
撃ち退けたり

接待掛は赤い紐を左の腕に纏うて居る。

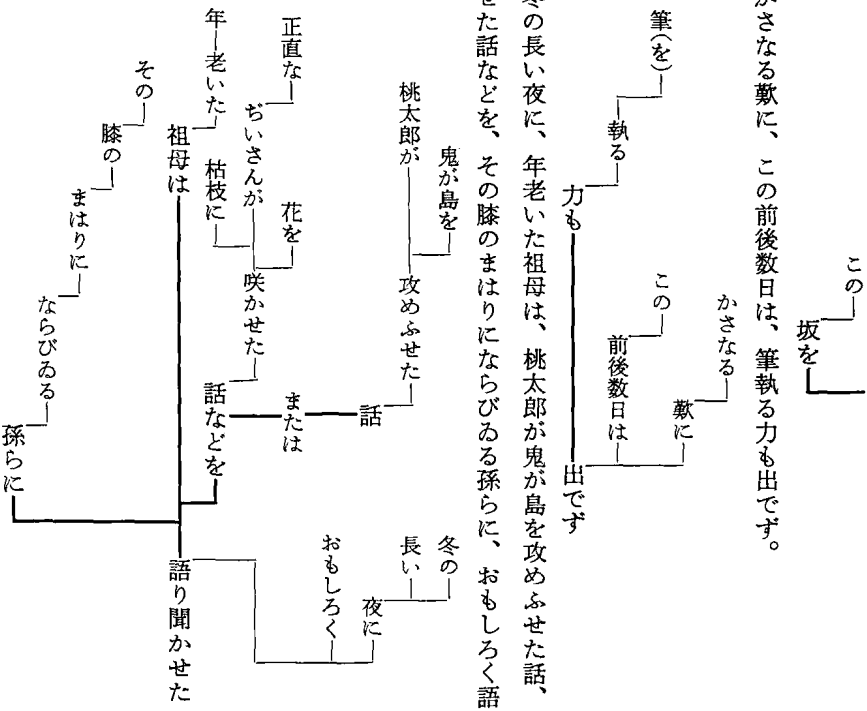
赤い
紐を
左の
腕に
接待掛は
纏うて居る

具原益軒は、儒学の外に、殖産・興業の事にも、志あつし。

儒学の
外に
殖産
興業の
事にも
具原益軒は
志
あつし

自転車に乗りて、この坂を降るべからず。

自転車に
乗りて
(人人)
降るべからず



かさなる歎に、この前後数日は、筆執る力も出でず。

冬の長い夜に、年老いた祖母は、桃太郎が鬼が島を攻めふせた話、または正直なぢいさんが枯枝に花を咲かせた話などを、その膝のまはりにならびゐる孫らに、おもしろく語り聞かせた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com